子どもと本をつなぐ仕掛け

●関西大学総合企画室　塩谷京子

読書は自転車乗りに似ている。できるようになれば、見える世界が大きく広がるからだ。そのためには、自分の意志と手順が鍵となる。

外で遊ぶことと本を読むことが子どもの楽しみだった時代は、既に遠い過去のこととなった。子どものまわりには、わざわざ本を読まなくても楽しめることが並んでいる。今を生きる子どもが読書を自分の「楽しみ」と感じるには、読書の階段を自分の意志で上っている感覚が必要であろう。しかし今やその階段に魅力を見出せないのか、それとも上る体力がないのか、階段を上れない子どもがいる。

学校教育でできることは、子どもに合った踏み台を用意し、自分で上れる高さの階段を作ることである。その踏み台として、読み聞かせや朝読書などの読書活動、資料や情報の探し方を学ぶ図書館利用指導、蔵書の充実や学校司書の配置など、学校図書館環境の整備が進められてきた。このような実践報告は各地で行われており、読書の効果は学力向上にまで及んでいる。

しかしながら、子どもの意欲をかき立てるための踏み台は多岐に渡ること、読書が楽しくなるにはそれなりの手順が必要であることから、一口に「読書」の楽しみを教えたいと思っても容易なことではない。

そこで、子どもたちにとって身近な国語の教科書の中に、図書館活用に関する内容を一年生から系統立てて載せた（教科書には目印としてコンピュータマークで表示）。そうすることで、子どもは楽しく本と出会え、教師は教えるべきことが系統的に見えるようになった。

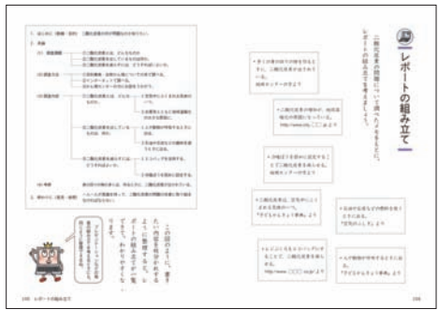
特に、読書と図書館活用の指導が別々の軸ではなく、図書館・情報という一つの軸で系統立てられている点が、小学生の実態に合っている。小学校低学年の子どもが読みたい本は、物語とは限らない。知らないことや疑問に思うことを解決するために図鑑を読みたい子もいる。恐竜が好きで恐竜の本ばかりを読んでいる子もいる。子どもがどこからでも読書という世界に飛び込んで来ることができるように、教科書のあちこちに散りばめられている絵本、物語、写真集、図鑑などが、子どもと読書をつなぐ役目を担っている。

このように多種多様な図書にふれながら、本の扱い方を始め、図書館での資料・情報の探し方や活用の仕方を学べるように構成されているのが、この教科書の大きな特徴である。

第1学年「としょかんへ　いこう」

しおや　きょうこ　公立小学校司書教諭を経て現在関西大学総合企画室特別任用教諭。著書に「しらべる力をそだてる授業！」（ポプラ社）などがある。

第6学年「ニュースと編集について」



第6学年「レポートの組み立て」

また、高学年になって、自分の主張をレポートに書けるように、段階を踏みながら、情報の調べ方や取り扱い方について、系統的に教材化されている。

「ニュースと編集について」では、集めたメモをもとに書かれたニュース原稿を比べることで、そこには編集という過程があることを学ぶ。教材の左右のページには集めたメモとニュース原稿が書かれており、情報を取捨選択したり、選んだ情報を並び替えたりするなど、編集した過程を想像することができる。

「レポートの組み立て」でも、調べたメモとレポートの構成を教材の左右のページに載せている。子どもが調べ学習をするときにも、教科書の例のように調べたカードがたくさん集まる。いずれも、調べたカードをもとに、レポートの構成をどう考えたかが見えるためである。ここでは、調べたカードを全部使ってレポートを書き始めるのではなく、カードをもとにレポートの構成を考える過程があることを学ぶ。レポートの「終わりに」で自分の意見を主張するためには、どのような調査内容を選んだらいいのかを、調べたカードをもとに考えることができる。

このように、学びの過程を習得できるように、子どもが調べたメモやカードと、それをもとに作成したニュース原稿やレポート構成を見開きのページで見えるように工夫しているのも特徴である。

さらに、あくまでも「基本は読書」という姿勢は、すべての教材の後に読書案内があることからも伺える。読書案内のコメントと表紙の写真も子どもと本をつなぐ役目を担っている。

つまり、教材文、読書案内、コンピュータマークのページは相互に関連し合いながら、スパイラル的に子どもと本をつないでいくのである。

これらの仕掛けにより、読書を楽しんだり、情報を集め吟味し活用したりすることが可能になる。それは自転車の乗りと同じように、「一生使える力」に違いない。

第3学年「カルタを作ろう」

第3学年「ピータイルねこ」